

尋常
小學
國民修身篇

壹卷

檢定合格本



井上哲次郎校閱
赤沼金三郎編纂

尋常
小學
國民修身篇

版權所有

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツ

ルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一

ニシテ世々厥ノ美ヲ濟スルハ此レ我カ國體ノ精華ニシ

テ教育ヲ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ

友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及

ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ

進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶



翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラ
 ス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 スノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱
 ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施
 シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其徳ヲ一ニ
 センコトヲ庶幾フ

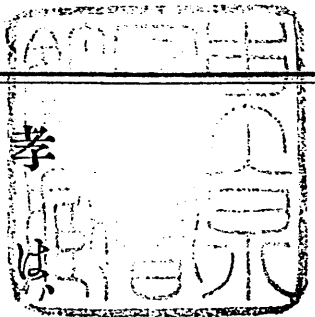
明治二十三年十月三十日

御名

尋常 國民修身篇卷一

井上哲次郎 校閱

赤沼金三郎 編纂



第一課

忠 孝

百行のもとにして、忠は、
 萬善のかしらなり。人の行、
 忠孝よりおもきはなし。

すべて の 善行 は、みな 忠孝 の
心 より いで、忠孝 の 心 は、
一 の 誠心 より いづ。
父母 に つかふる 誠心 を うつして
君 に 事ふれば、忠良 の 臣民
となり、君 に 事ふる 誠心 を
移して 師 に 事ふれば、順良 の
生徒 となる。

順良 なる 生徒 は、師 を 敬ふ
こと、君 を 敬ふ が ことく、學校
を 愛する こと、國 を 愛する
が ことし。
忠良 なる 臣民 は、君 を 尊ぶ
こと、父母 を 尊ぶ が 如く、國
を 愛する こと、家 を 愛する
が 如し。

忠孝 は、その名を二にすれども、その心は、二にあらす。ゆゑに、忠臣は、孝子の門より出づ。といへり。

第二課

小楠公の忠孝
楠正行卿は、正成卿の嫡子なり。延元元年、正成卿、朝敵

せいばつのため、攝州に下りけるとき、正行卿が十一歳にて、供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より、河内へかへしけり。

このとき、正成卿は、正行卿をちかくよびよせ、いひけるやう、「今度の合戦は、うちとにの

かくと なれば、
余の、汝と
見ん こと、 今日
と かざり と
思ふ なり。 され
ど、 わが なき
あと も、 忠義
の 心 と わする



べからず。 これぞ 汝 が 第一
の 孝行 まる。 と なくく
いひふくめて、 にしひがし にわかれけ
り。
かくて、 正成 卿 は、 間 も なく、
湊川 にて いさぎよく 討死 しける
が、 正行 卿 は、 よく 父 の せ
しへ と まもり、 母 の いましめ

に 従ひ、あつたにも 朝敵 せい
ばつ の まね を なし、 忠義 の
心 を はげましけり。

正行 卿 は、成長 の 後、志ばく
賊軍 を やぶりける が、正平 三
年、賊 の 大軍 せめ來りしとき、
一族 うちつれ、三千人 を ひき
て、四條畷 に すゝみ、敵兵 八萬

人 と 戦ひ、敵 あまた ころして、
弟 正時 とともに いさましく
討死して、かぐはしき 名 を 千代
に とめけり。この 時、正行
卿 は、わづかに 二十二歳 なり
き。子の 辭世 の 歌に
かへらと、かねて おもへば
梓弓、なき 數 に 入る 名

とをわらう。

第三課

孝行

父母は、我を生み、我を育て、
 たまふのみならず、あげくれ、我
 を愛し、その身をわすれて、
 我を愛したまへり。
 父母の恩は、海よりもふか-

く、山よりも高し、その恩
 に、むくいんと思へば、天の
 きはまりなきがごとし、子たる
 ものいかでか、孝養の心を
 わするべき。
 孝養の心あつきのものは、何事
 も、父母のおふせにそむかず、
 その心となくさめ、わが身

せ ついしみて、父母に心配せ
 かけぬ やう、心がくるものなり。
 父母を愛する心、内にふかく、
 敬ふかたち、外にあらはるゝ
 せ、孝子とはいふなり。
 孝子は、父母のため、力をせし
 ます。はたらきて、わが身は、
 うゑこゝゆるとも、父母の養

せが かくぬ やう、心がくるもの
 あり。

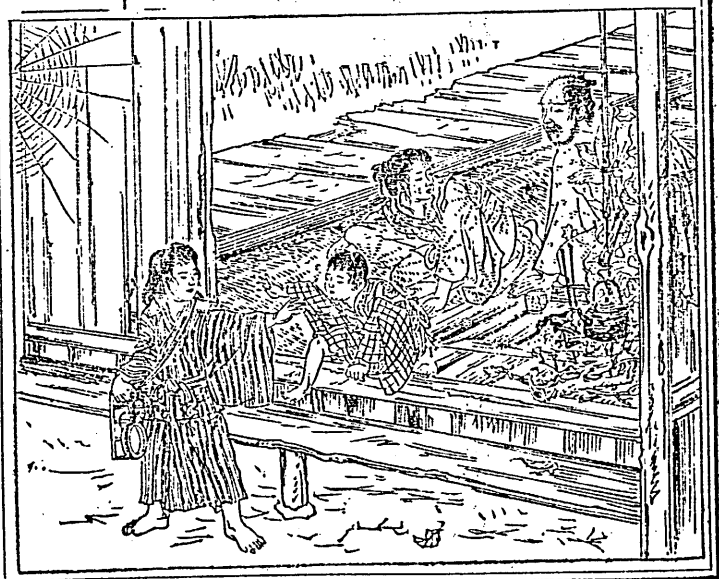
第四課

孝子 藤岡 嘉一郎 の 話

むかし、因幡の國に、藤岡 嘉一
 郎 といふものあり。うまれ
 つき 孝心 ぶかく、よくその父母
 に 事へて 孝養 せ つくしけり。

嘉一郎 七歳の時、その父、眼病にかかりて、盲となりしに、母は、夫を捨て、その家とさりしかば、嘉一郎は、父の看病のかたはら、毎日、近き村より、餼をかひきたりて、これより、わづかなるまうけにて、父をやしなひ、五歳なる

妹と三歳なる弟とをそなたでけり。嘉一郎の、十一歳となりしころ、妹は、人にやとはれ、その給金と兄に



おくりて、くらしの たしなへを
 なし、弟は、兄と、たすけて、父
 の 病苦を、なくさめければ、父
 も 三子の 孝養を、よろこびて、
 其 病苦を、わすれ、毎日、わらわ
 せ、つくりて、これと、うり、やすく
 その 日と、おくりしとぞ。

嘉一郎、七歳の身と、以て、みづ

から、かせぎて、三人と、養ひし
 に、くらぶれば、父母とも、つ
 らが、なく、日々、學校に、いづる
 ことを、得るものは、いか
 ある、幸ぞや、これを、思ひて、
 つねに、孝養の心を、こたる
 まじきことなり。

第五課

順良

師は、父母にかはりて、吾等と
 教へたまふものなれば、師に
 事ふることに、親に事ふる如
 如く、かほかたちとやはらかにし、
 かりそめにもいつはることなく、
 行を正しくし、心をついせみ、心
 を正しくすべし。

生徒たるものは、師とてうやまひ
 ひて、その教をまもり、何事
 もそのおほせに從ふべし。
 よく師に從ふときは、學問
 に上達して、その身の幸を得
 べし。
 生徒たるものは、みづからへり
 くだりて、心をむなしくし、師

の教をうけては、其至極
 をつくさんと志して、一つの
 善を見ては、これに従ひ、一つ
 の義をきいては、これを
 行ふべし。これこそ順良の
 生徒といふなり。

第六課

徐積の順良なりし話

徐積は、安定先生の門人にて、
 行をばけまし、徳を立てし
 人なり。積は卜めて先生に
 まみへしとき、頭のかたち
 すこしかたむきたれば、先生、聲
 をばけしくして「頭のかたち
 をまほくせよ。」といましめられ
 けり。

積 この心と

おしひろめて、此

教は、ひとり

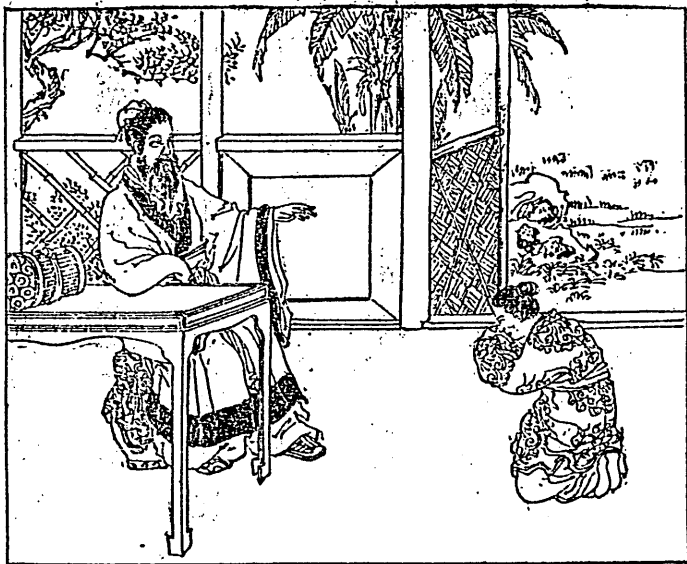
頭のことのみ

にかざるべか

らず、心の上

も、またかく

のとくとなる



眼をいかにとけおひ、
匠夫心せむゆゑ、
後よこしまなる心、

あらざりしとぞ。

かくのさとく、
おかく師の教

をきはめて、
なれとまもるもの

は、
立つてと知る

といふ。かゝる人は、
何事

もよくしなすとけらるべし。

第七 課 友愛

友愛 友愛 友愛 友愛 友愛 友愛 友愛 友愛

兄弟 は、同じ 父母 より、うまれ、職同

じ ちまの を のみ、同じ 家 に

☆ そたち たる、もの まれば、あたか

も、五指 の、あひ つらまれる 如

如也。

兄弟 は、またあひに、あひをたしめ、

兄弟 は、三弟 せ あはれみ、弟 は

三兄 返答したか、あはれみ、弟 は

事 なき、しとき に、あたりて は、兄弟

の た、あはれみ、あはれみ、思は

ども、あはれみ、あはれみ、あは

れども、あはれみ、あはれみ、あは

れども、あはれみ、あはれみ、あは

れども、あはれみ、あはれみ、あは

春日野の、はらからこそは、世
 原の中、のうき田の、なげき、
 なげき、と、
 第一八 謝、
 毛利元就の子、
 話、
 毛利元就、年、老い、病みける時、
 其子三人、枕、

三本の矢、
 つかねて、これ、
 と、それ、と、云ひ、
 ければ、三人、の、
 子は、代る、
 こゝろみたれども、
 なかく、折れ、
 ざりけり。元就



さらに一本づつ、折らしめければ、皆たやすく折りぬ。

元就、三人に向ひて云ひけるやう、

「汝等、あかをよくして力を

あはせば、此矢の折れがたき

が如く、しかせざる時は、此

矢の折れやすきが如くならん。

つゝしみて忘るゝことあかれ。」

と云ひ終りてうせけり。

その後、三人の兄弟は、よく

父の遺言をまもり、心を

かなへて、互に助けあひければ、其

家ながくさかへけり。

第九課

親切

人とまとはるには、親切をむね

とし、心のまことより愛し
うやまふべし。

同ト 學校 の 生徒、同ト 級の

朋友 は、兄弟 の 如き もの

あれば、ことに、あつく 親切 を

つくすべし。

我 より、人に 親切 を 盡せば、人

も、われ に 親切 を 盡す もの

なり。

人 を 愛し、物 を あはれみて、禽獸

に いたる まで、なさげぶかく とり

あつかふべし。

人の、われ に なす とき、わが

よろこぶ こと を 人に なせば、

人も また 喜ぶ もの なり。

人の、我れ に なす を 願はざる

ことは、人になすことなかれ。

第十課

ある小學生徒の親切なりし

話

ある小學校に、太郎といふ小兒

ありけるが、病にかかりて、ひさ

しく學校を休みけり。

一日、同級生の一人、花を

りて、太郎の病をみまはん

といひければ、同級生は、のこらす

同意しけり。

かくて、午後には、各、花一枝づゝ

もち來りて、うつくしくこれを

つかね、めい／＼名ふたせした

いめ、學課のせはりしものち、年

のたけたるもの二人を使

として、太郎の家へみまひにつかはしけり。太郎は、久しく学校の友とわかれ、病になやみけるが、思はず同級の



ものより、うつくしき花と澤山もらひければ、大に喜びて、半日、二人の友とあそび、その夜は、つねになくやすくねむりけり。

太郎の両親は、ふかく同級生の親切に、かんと翌日、学校におもむきて、教師にあひ、

なみだをながして、あつく禮
 どのべければ、教師は、はづめて、
 このことと知り、生徒一同
 とあつめ、感涙をながして、この
 美行をほめたりとぞ。
 親切は、心のまことにありて、
 品物の多少にはよらぬもの
 なれば、一枝の花にて、心

の誠より、おくれれば、よやく人をして
 感ぜしむべし。されば、のいかぬに
 まづしき人なりとも、親切の
 行をば、なし得らるゝものなり。
 第十課
 愛校
 学校をわが家と思ひ、つね
 に、学校のためをば、はかり、

苦勞をいとはず、學校のため
 に、はたらかむべし。思ひの
 つねに、學校を愛して、その
 名を、あぐるやう心掛け、智
 恵と、徳とを、やしなふべし。
 今日、學校の名を、あぐるもの
 は、成長の後、國のため、功
 徳を立て、國の光となすべし。

今日、學校のためにはたらか
 むのは、成長の後、國のため
 はたらきて、忠臣となりて、
 吾等、成長して二十歳に至れば、
 みな、兵士となりて、わが國
 を、まもるべし。
 わが身と、わすれて、わが國を

守り、君のため、世のため、わがいのちをすつるは、わが身のまはまれなり。

第十課 小學生徒の學校を愛せしむ

小學校の生徒等、あまた學校の庭にあつまり、まりと

なげで あそび居けるが、とりふじ、あしき小兒かきとやぶりて庭にいりこみ、そのあそびに入らんとしけり。



生徒等は、これを見て、大に
 いかり、「わが学校のかきと
 やぶりとは、我が学校と
 かるしめたるものなり」といひて、
 この生徒をいましめさとして、
 庭よりおし出し、さらに、学校
 の正門より入らしめし
 のち
 共にころよくあそびけりとぞ。

皇御國

すめらみくにの
 いかなる事と
 たゞ身に
 君と親とに
 つとむべき。
 誠心
 つくすまで。

皇御國の
 どのこ
 らは、

尋常
小學

國民修身篇

貳卷

檢定合格本

